へ13
3728
4

はるの
みやこ
大角
柳さくら
ものの
種屋角重
ひろう
七海のと
美舎
発市

鄙法都
大内物語
七編上
種彦作
芳虎畫
七編下
彫師 梅堂

門 へ13
3728
4

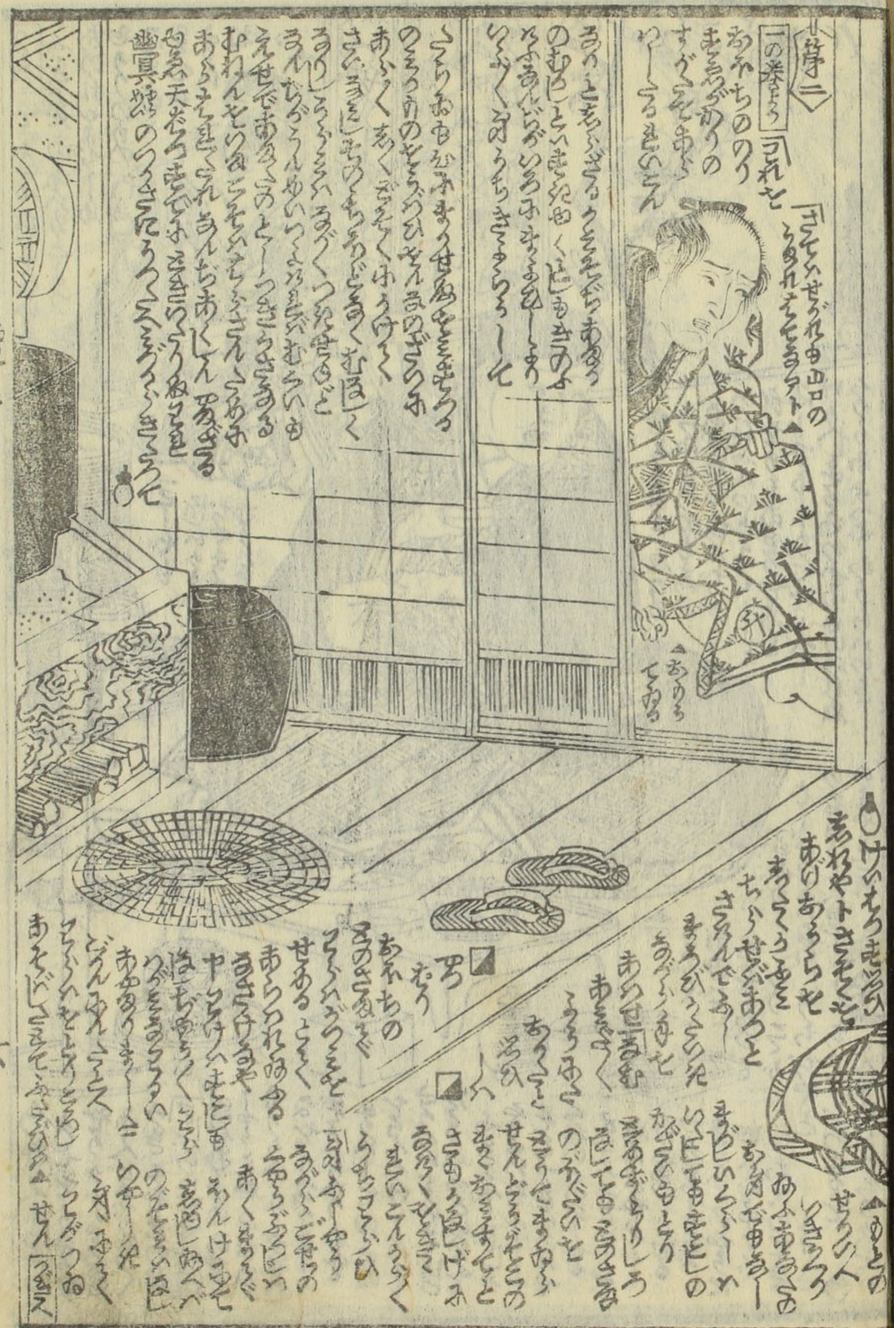
第一

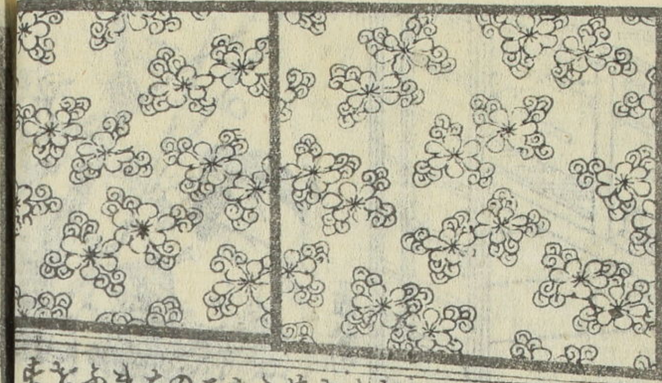
元治二年乙丑 開春

柳亭種彦

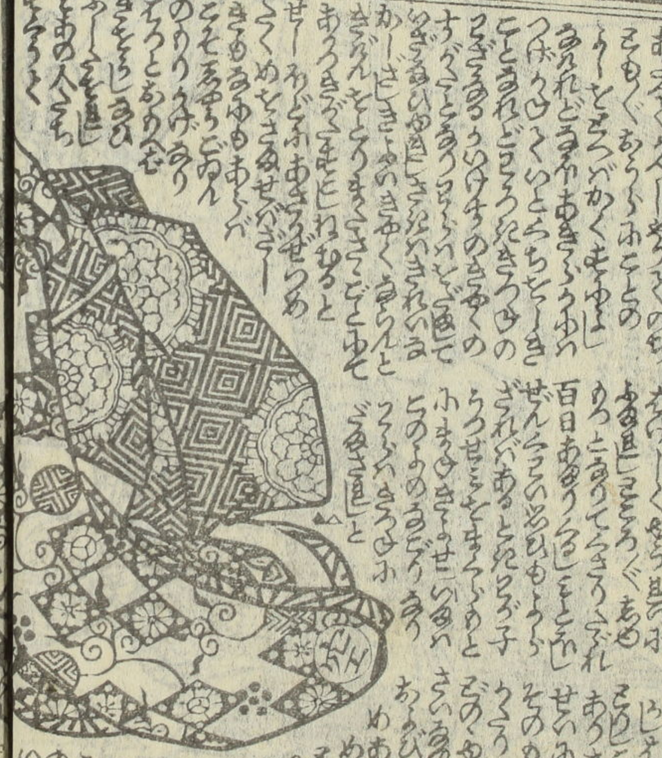
隆全姜が小字を虚蟬とゝ空々言あれど。大内義隆記ゝ據有晴賢若ゝ已時松ゞ崎の寺にして。此殿後朝ゝ贈りたゞゝ歌。めぬあなつとをめて残らむ空蟬の世のあゝひとゝ思ひあはべゝと。此哥を取て假ゝ名付つ。問田の子ゝて持長養子ゝゝる系圖有。それハ可ゝれど義隆郷ゝ。全姜を先輩として置あゝゝ弟草残菊ゝ冬ン至梅ゝ。挿花の主客ゝゝねハ何も兄ゆゝ疎ゝと余ゝして思ハぬゝねど是亦一證ありて。西崔が一代男に世之助十四歳の初夏大和國の仁王堂ゝて。廿四歳の乙子と嫖とを記り。仮初ゝるかゝる一座ゝて年穿鑿ハ用捨可有と書られ共猶妙ゝゝねバ次編ゝ早々元服さを俄に東々家老職とからじて牽強ゝる。先その由をこゝに録を

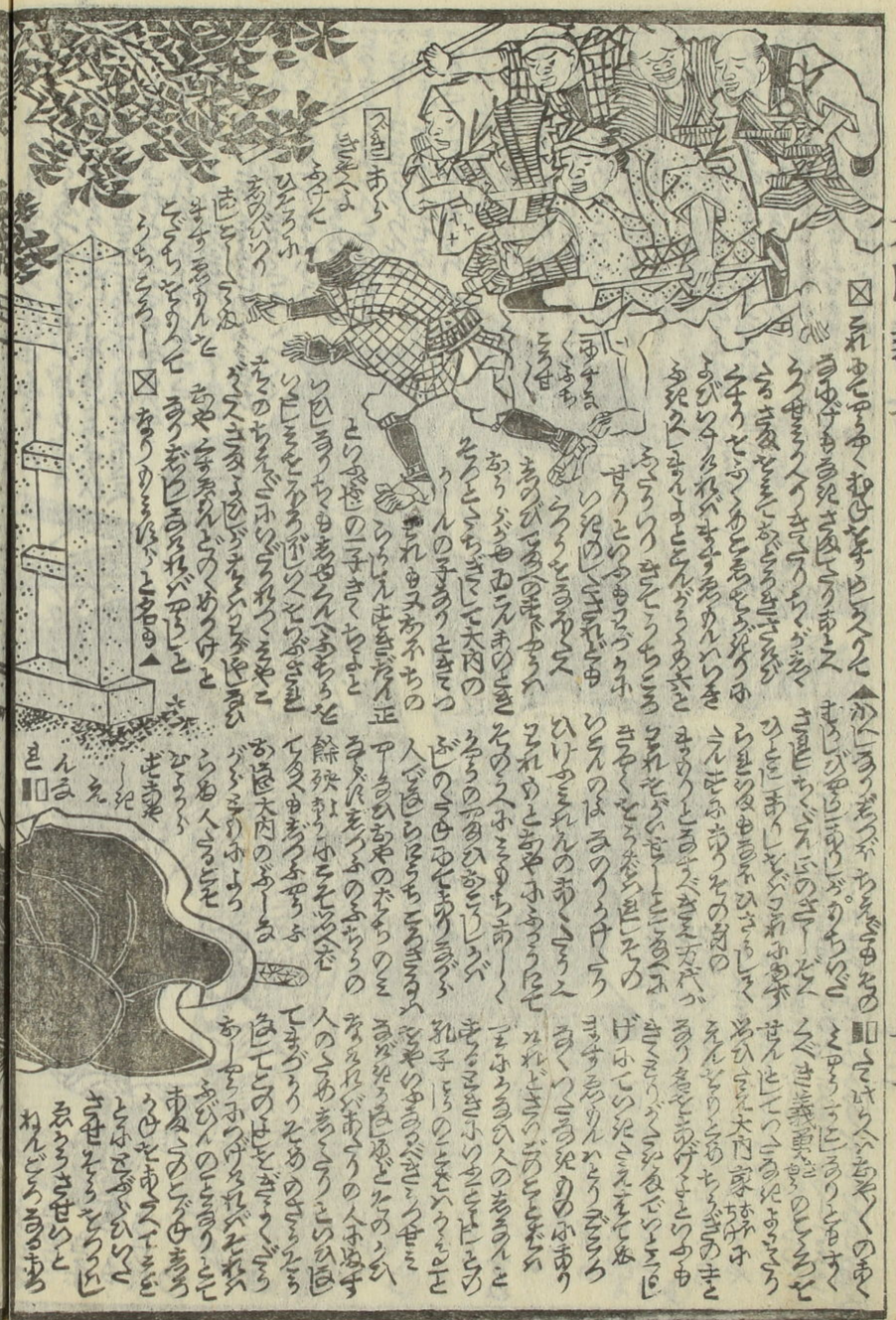
大内太郎恒持
小幡越次郎義實

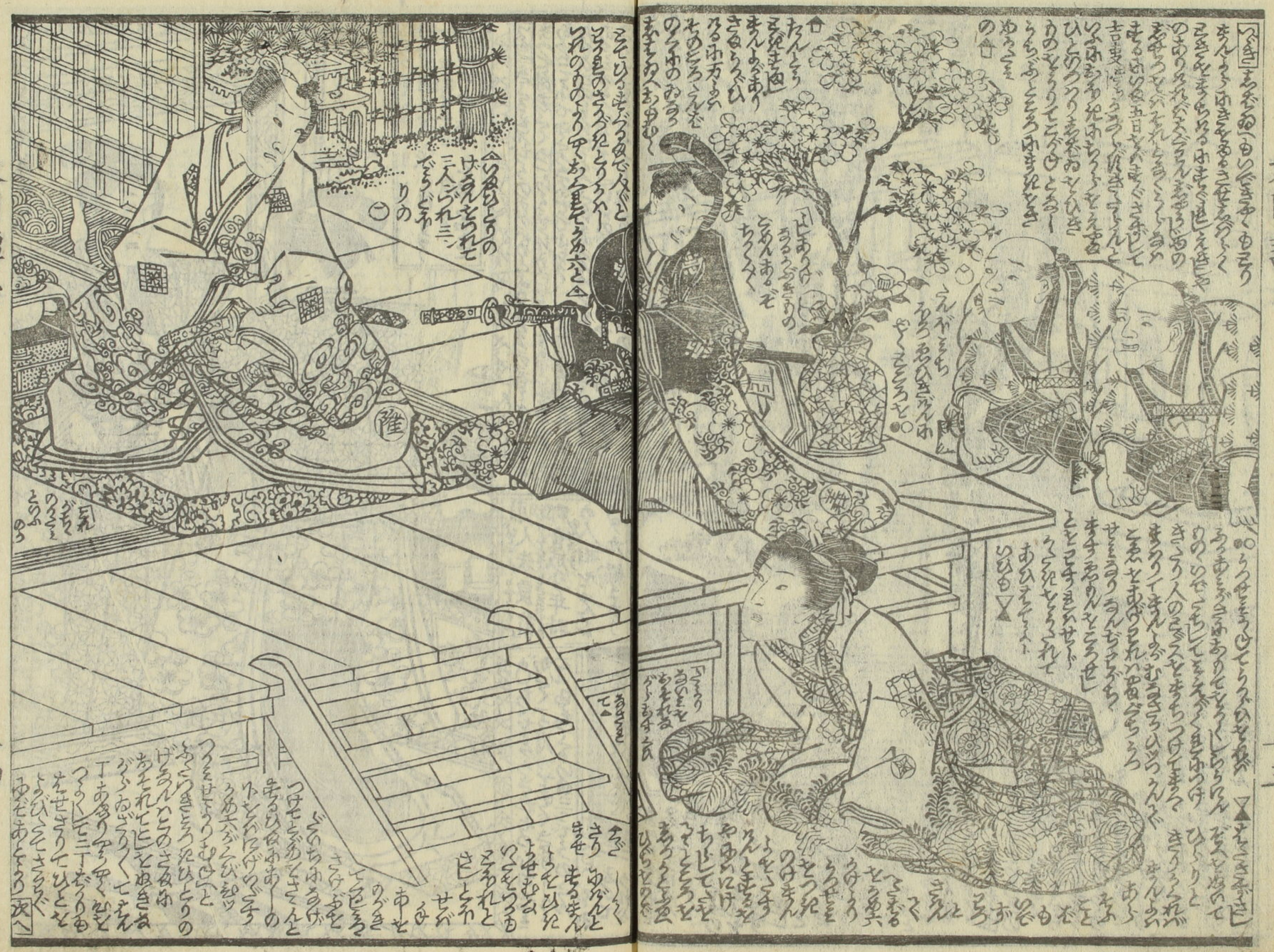




つゞき　かけいぞろく久七とそのふ　〔図〕さくらふゝこちらゞヒト　△のゆーしいそう

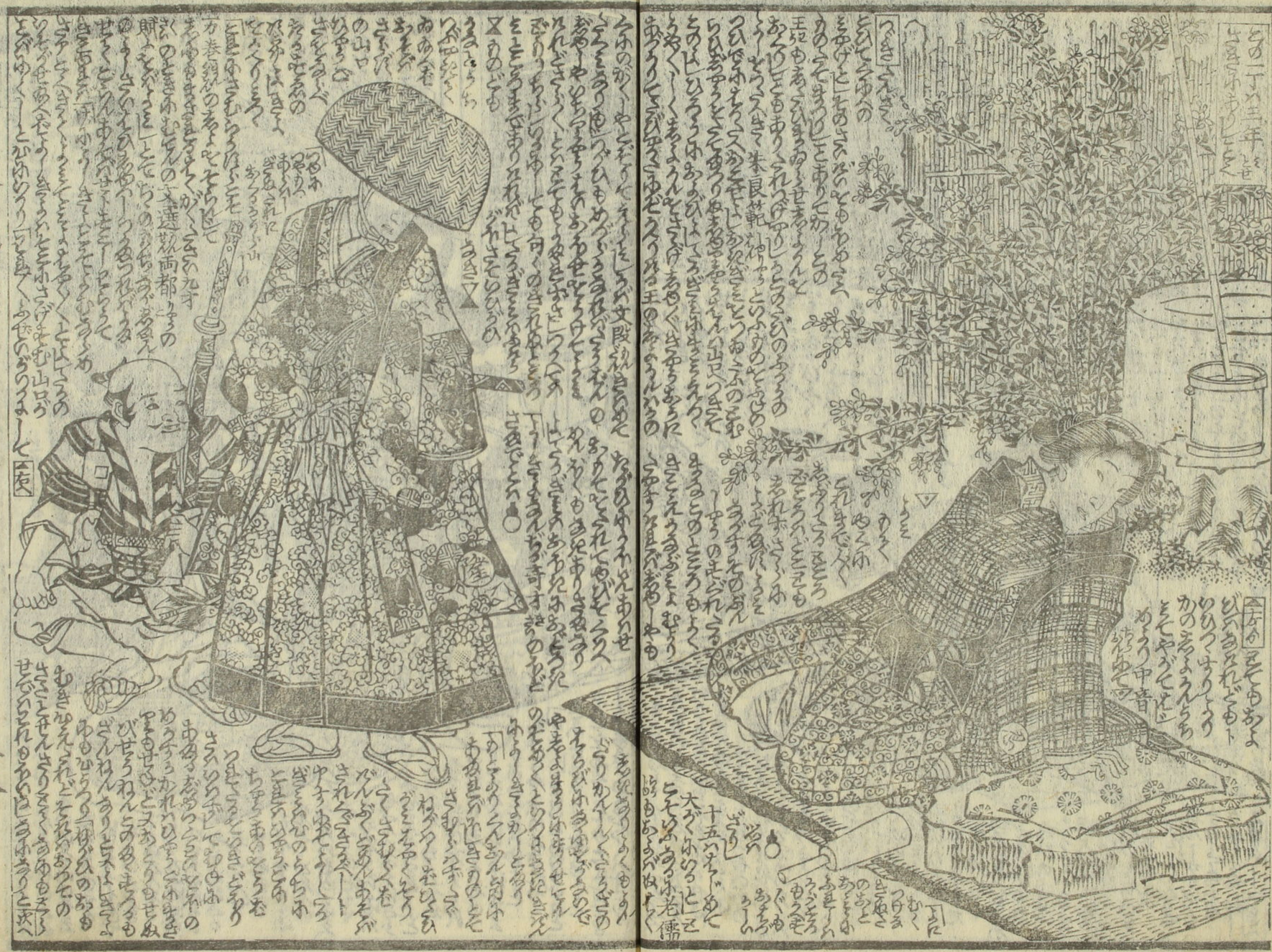


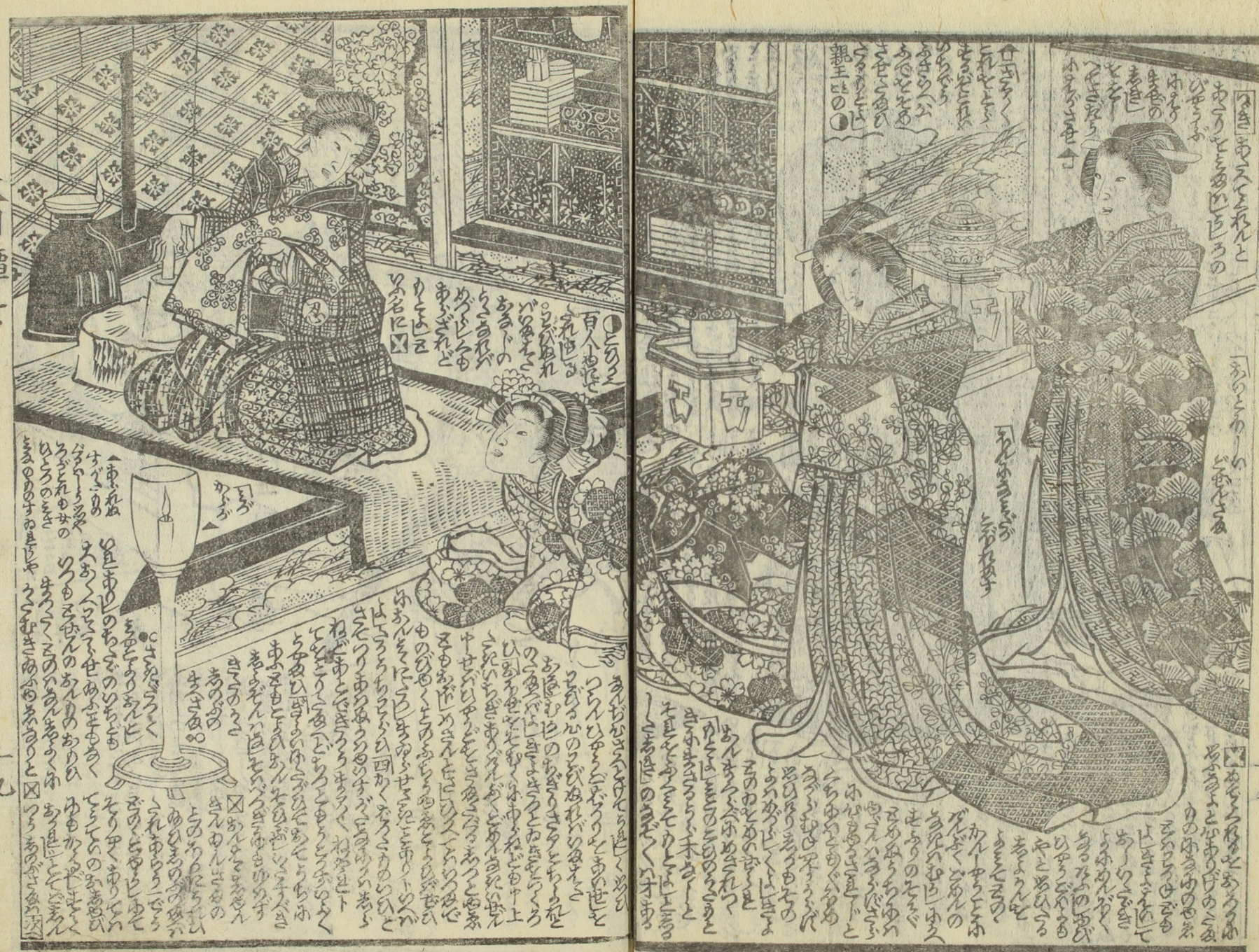




空蟬大内家の臣とうり
山口兵庫と改名せ

明人朱良範
郡音成少年時
の人相をえる
る九編まあり





種彦著
芳虎画

交来書

竹雀千代呼　西馬補案　國輝画圖

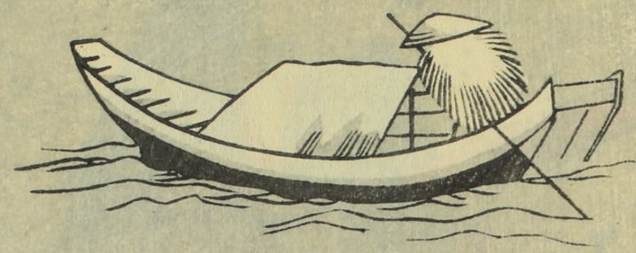
聖德太子大和鏡　万亭應賀作　壽齊國貞画

三鱗形鏡倉双帝　西馬作

雲龍九郎偷盗傳　故人三馬遺稿　増補西馬案　画工一勇齋

金地本草紙問屋　てりふり町　笑壽屋庄七版

山
淨永寺
の
名誉



おかの
名誉
八幡宮

英芳居
梓

柳言
作

今
梅

岩國
の
名橋

花南の
八編上
錦昇堂梓
大江戸
小粋のうち
種彦作
芳虎画
八編下

狙頰の硯

種彦著述茅舎書画

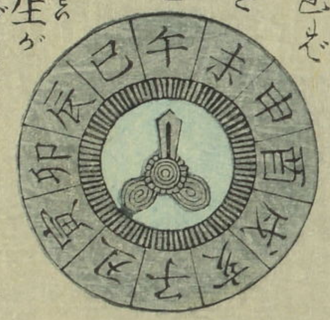
大内譚

八編下巻

丙寅新板　錦昇堂梓

陰德贅言

自鳴鐘の機關オールゴールの仕懸を奇と云人もあれど白隱の隻掌の音乃悟がゝ紀ホ思慮を費し陶淵明が無弦琴乃趣を味ひて妙々といふ人もあり茶器や一二行の歌裂の鑒定しも真偽ホ苦しむ數奇者の迷ひ實を記てホ虚らしき合巻をうんで樂とせるもやはしさ人を今ハ有とぞさうとて愚生が作ぶどハ二合のうるい水唐繰狙の挽臼廻らぬ筆其詞さへ條さへ古ハ紆曲ぬ正筆あれどあハやや茶人ホ賞翫ひるゑ〻なんとせんうさ名壺の手前ホもづうし支草造紙あのホ紀



慶應二年

柳亭種彦録

丙寅秦月

大内義隆記ふ云
都督在世の間ゝ石見國
太田の郡ふい銀山出來つ
宝の器とあり見しゞ
異朝ゝりハこれをきて
唐土天竺高麗の船を
數々渡しつ天竺仁の
送物様々の其中ふ十二の時を
司るふ夜る昼の長短を違ゞ
響鐘の声と十三の琴の絃
ひゝざるゝり五調子十二

享禄天文の頃とぞ

調子を吟ぜると老眼
のゝざるのふるゐる鏡の
うゞのあれど程遠ゝれどゝゝり
ゝの紀鏡ゝ二面さゝゝゝゝ
不思儀の
重宝を五
さゝゝ送ゝるとゝゝ』
とゝのゝされハ自鳴鐘
ゝ當時始て泊來しゝる
ふやひゝざるに調子を吟ぜると
有ハオールコールのさゝのゝゝゝ

柳亭再録

武

竹

竹

竹

橋番

種彦著 芳虎畫

大内譚八
十二
十三

稲妻形　二十編　種彦作
怪鼠摽　二十一編　國貞画
子七編　二十二編　國貞画

樂亭西馬稿
曾文作
國明画

其由縁鄙得　二十編　種彦作
二十一編　國貞画
二十二編　國貞画

十勇士尼子の礎　五編　魯文作
六編　芳虎画

雨夜鐘四谷雑談　九編　魯文作
十編　芳虎画

比奈乃都大内譚　三編　種彦作
四編　芳虎画

地本問屋　江戸てりふり町　ちひすや　庄七

斐那乃都大内譚八編

柳亭種彦著
猛齋芳乗畫

笑壽屋版